

はじめに

海野 多枝 (東京外国語大学 助教授)

吉富 朝子 (東京外国語大学 助教授)

根岸 雅史 (東京外国語大学 教授)

本書は、「21世紀 COE プログラム言語運用を基盤とした言語情報学拠点」を構成する言語教育学班(第二言語習得研究班と評価班)の2004年度の研究成果、及び、『TUFSS 言語モジュール』を利用した現場からの実践報告と教材評価研究を取めている。

第二言語習得研究班では、次の2つの研究課題に取り組んできた。まず、第二言語習得研究の成果を活かした教材開発研究で、これはさらに、相互に関連する2つの課題に分けられる。第一に、『TUFSS 言語モジュール』を有効活用するための補助教材の開発である。日本語グループでは、『日本語会話モジュール』を利用する学習者用ガイドの作成に取り組んだ。基礎調査として、既存のE-ラーニング教材で提供される学習者サポートシステムを調査し、その成果や昨年度の学習ストラテジー・ビリーフ調査の成果を活かして、『学習者ガイド』の基本設計を行った。英語グループでは、昨年度作成した『英語会話モジュール教材附属指導者用手引き』の改訂作業を進めた。第二に、『TUFSS 言語モジュール』を用いた教育の実践と、現場における教材評価研究である。今年度は、日本語と英語に加え、フランス語のモジュール教材利用に関する研究も合わせて報告する。

第二の課題は、第二言語学習者言語コーパスの構築及びそれを使用した第二言語習得基礎研究である。日本語グループでは、日本語学習者言語研究の先行研究をまとめ、本COEプログラムで作成した『上級日本語学習者の作文データベース』の分析を試みた。英語グループでは、(1)日本人高校生と英語母語話者による英会話データ、(2)英語圏からの日本人帰国子女と英語母語話者による英会話データ、(3)日本人大学生英語中上級者同志の英会話データとストラテジー内省データ、の3種類を定期的に収集し、文字化し、コーパス構築作業を進めた。また、学習者言語データを利用した基礎研究についても、まだパイロット的な段階ながら、その試みは本格化しており、本書でもその成果の一部を報告する。

評価班では、主に欧米諸国で開発された言語発達段階の枠組みの特性の分析、および、それらの日本人外国語学習者への適応可能性を探ってきた。本年度は、これまでの研究をさらに実証的に進めるために、いくつかの研究を実施した。

本書では、上述の成果を、本書の副題でもある教材開発、評価、第二言語習得の3分野に分けて掲載する。以下、各セクションの詳細について述べる。

I 教材開発

ここでは、日本語、英語、フランス語を対象とした、モジュール教材の開発・利用・評価に関する8つの論文が収められている。

最初の3つは、『日本語会話モジュール』に関するものである。『日本語会話モジュール』は、日本の大学生活で使われる日本語の会話を学習したい国内外の学習者に向けて開発されたが、教室使用のみならず、自律学習による利用が多くなると予想される。日本語グループでは、こうした学習者へのサポートとして、『日本語会話モジュール学習者ガイド』（以下、『学習者ガイド』）の開発に取り組んだ。『日本語会話モジュール学習者ガイド』開発の基本方針と理論的背景（海野・菊池・野村）は、『学習者ガイド』開発の基本方針を記述し、その理論的背景を論じ、具体的構成案を提示している。「e-learning教材における第二言語学習についての基礎調査」（橋本・森本）は、既存のEラーニング教材57を調査し、そこに見られる自己学習用のサポートシステムの機能を分析したもので、『学習者ガイド』開発の基礎ともなっている。また、「会話教材としてのTUFSS日本語会話モジュールの使用ーインドネシア北スマトラ大学でのアクション・リサーチ」（松本）は、『日本語会話モジュール』をインドネシアにおける日本語の会話教育で使用し、授業の改善に向けてアクション・リサーチを実施し、その成果を報告している。こうした実践の成果も、今後の『学習者ガイド』の開発に取り込んでいくことが期待される。

次の2つの論文、「会話モジュール『えいごではなそう!』に関する一考察：オンライン教材としての課題と可能性」（狩野）と、「教材分析と評価ー既存のチェックリストと教材評価の方向性ー」（鶴澤）は、『英語会話モジュール』の教材評価に関わる報告である。狩野は、『英語会話モジュール』を日本人児童とその保護者に使用してもらい、特にウェブデザインにおける「使いやすさ」「実用性」の面からの評価を試みた。そしてその結果を踏まえ、今後のウェブデザイン上の改善策や、附属指導書の内容に関する修正課題をまとめている。鶴澤は、既存の教材評価チェックリストを市販のEFLテキスト教材内のスピーキング活動の比較に使用することで、既存のリストの有用性と問題点を考え、『英語会話モジュール』の評価に必要な視点や評価の方向性を探った。

続く3つの論文は、いずれも『フランス語モジュール』に関するものである。「フランス語発音モジュール「理論編」の開発と評価」（杉山）は、ネットワークを利用した教材である『フランス語発音モジュール 理論編』を開発するための理念として、特に、日本語母語話者を意識し、単語や例文の選択や視聴覚効果に工夫を凝らしてシラバス設計が行われた点に触れ、その上で、開発された「理論編」について、学習者の利用回数と学習が行われた期間について調査するとともに、教材に関する自由記述により、「理論編」のコンテンツについて意見聴取を実施した。次の「TUFSS言語モジュールを用いた授業 東京外国語大学フランス語専攻の試み」（フランソワ・中田）は、本学外国語学部客員助教授のルーセル・フランソワが行った「フランス語会話モジュール」を用いた2年生の授業（2004年度）についての詳細な内容報告である。まず、授業のコンセプトと構成について述べた上で、授業展開の具体例を記述し、最後に、授業の総括と今後の課題について述べている。最後

の「フランス語会話モジュールの評価」(時田)は、学習者の側からの授業評価を行い、その結果を報告している。授業評価は、以下の4点について実施された。(1)『フランス語会話モジュール』が学習者のニーズを満たす教材かどうか。モジュールの機能、使い勝手、ダイアログについて、学習者はどのように捉えているか。(2) 授業教材として、『フランス語会話モジュール』はどのように活用できるか。(3)『フランス語会話モジュール』は、学習者のどのような能力を発達させることが可能か。(4) モジュール教材はどのような学習者に向いているか。この評価を行うことにより、『TUFUS 言語モジュール』の改善とその効果的な利用について考察している。

II 評価

ここには、評価班の研究成果として3つの論文が掲載されている。まず、「ヨーロッパにおける CEFR を利用した言語政策」(工藤)では、Common European Framework of Reference for Languages (ヨーロッパ言語共通参照枠組み。以下、CEFR)が欧州諸国の言語政策において、現在どのように利用されているのかを調査している。「言語能力記述アンケート実施結果報告」(根岸・中島・永田)では、これまでの言語能力記述枠組みに関する基礎研究を踏まえ、CEFR を基に2種類の言語能力記述アンケートを作成・実施し、その枠組みの日本人外国語学習者への適用可能性を検証している。その結果、この能力記述枠組みが、大枠としては、日本人学習者へも適応可能であることが確認された。「英語スピーキング Can-do アンケート調査と自己評価方法の妥当性について」(周)では、Can-do アンケートを用いて、本学1年生の英語スピーキング Can-do 実態を調査した。同時に、一部の学生のスピーキング・テスト結果と Can-do アンケートへの回答の関連性を分析することで、Can-do statements による自己評価方法の妥当性を検討している。

III 第二言語習得

次の5つの論文は、学習者言語コーパスの構築及びコーパス等を使用した調査について報告した第二言語習得基礎研究である。最初の2つは、日本語の学習者言語研究に関する論文である。「上級日本語学習者の作文における語彙の誤用」(鈴木)は、本 COE プログラムで開発した『上級日本語学習者の作文データベース』を用いた分析結果である。その基礎を成すのが、資料編にある「日本語学習者言語研究に向けての基礎調査」(古川)で、学習者言語研究の先行研究をまとめたものである。また、「日本語の学習者言語コーパスについての基礎調査」(古川)は、今後の学習者言語コーパス開発に向けての基礎調査として、既存の日本語学習者言語コーパスを調査してまとめたものである。

次の3つは、英語を目標言語とする第二言語習得に関する論文である。「日本人英語学習者における認知的熟慮性－衝動性と学習ストラテジーの関係」(丸井)は、英語学習に成功している学習者の認知スタイルと学習ストラテジーの関係を調査し、個人の資質に合ったストラテジーを探ることを試みた。その結果、学習者の認知的熟慮性－衝動性の傾向と、

個人の言語学習におけるストラテジー使用には少なからず関連があり、熟慮性や衝動性の度合いによって、使用するストラテジーの種類や使用頻度などに異なる傾向があることがわかった。「A Corpus-Based Study of Japanese EFL Learners' Request Strategies」(植田)は、日本人英語学習者が談話において用いる依頼ストラテジーを、SST コーパスのロール・プレー・データをもとに分析し、第一言語からの語用論的転移が見られること、そして学習者の第二言語能力によって依頼ストラテジーの特徴に違いがあることなどを示した。「流暢性と語彙フレーズ, hedges, との関係について—日本人英語学習者コーパスからの示唆—」(西川)は、帰国子女会話データを、特に語彙フレーズと呼ばれる連語表現と、会話ストラテジーである hedges の使用の面から分析し、帰国子女コーパスを活用した今後の研究や、その成果を英語教育とりわけ『TUFUS 言語モジュール』教材開発に応用する可能性について考察している。

IV 資料編

「日本語学習者言語研究に向けての基礎調査」(古川)は、日本語の学習者言語研究の先行研究を概観したもので、上の第二言語習得研究報告の基礎資料として掲載している。

本書に収められた研究成果が、言語教育学・第二言語習得研究のさらなる発展に寄与することを願う。最後に、体裁面の編集は、東京外国語大学大学院博士前期課程の鈴木綾乃と丸井ふみ子が担当したことを付記しておく。

2006年 2月